

世界聖餐日・世界宣教の日 説教 「廃墟の中から」 要旨  
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年10月2日

マタイによる福音書 12:43~50

聖餐による教会の一致と混迷を深めつつある世界の一致を願い、始まったものが「世界聖餐日」でありました。その始まりは1936年、アメリカ長老教会でのことですが、その年は、日本では2.26事件が勃発した年でもありました。このように、対立を深めつつあったのが当時の世界情勢ではありますが、日本基督教団がこの「世界聖餐日」を行事暦に取り入れたのは、敗戦直後の1946年、昭和21年のことでもあります。それは、私たちが分裂、分断の結果、深い痛みを経験したからです。しかし、戦前のその試みも、また、戦後始められた私たちの試みも、残念ながらそれで分裂、分断が解消されたわけではありません。現在、より深刻な状況にあるのは皆さんご承知の通りですが、では、そうした中で、私たち日本基督教団はどうか。約1700ある教会が一致しているとはなかなか言いにくい状況にあるのは間違いありません。

その理由の一つに聖餐を巡る捉え方の違いがあるのですが、ちなみに、聖餐を巡る問題とは、いわゆる、未受洗者陪餐の問題です。ただ、私たち藤沢教会はこの問題に直接与することはありません。藤沢教会では、未受洗者陪餐を認めてはおりませんし、今後も認めることもないからです。なぜなら、聖餐は、洗礼を受け、主のものとされた者にのみ許されたものであり、そこには明確な基準があるからです。ただ、基準を設けず、すべての人々に開かれるべきだと主張する人たちもいるのです。もちろん、そうした考え方を頭ごなしに否定するつもりはありません。けれども、聖餐は、主の十字架と復活の出来事のその後より教会が大切にしてきたものであり、聖餐式の前に一言お断りをさせていただいているのは、そうした現状を踏まえてのことでもあるのです。けれども、それは、私の個人的見解を述べるものではありません。今と一緒に聞いているマタイによる福音書でも、聖餐については次のように語られているからです。

「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。『取って食べなさい。これはわたしの体である。』また、杯を取り、感謝の祈りを唱

え、彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。言うておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。』一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。」と、マタイによる福音書ではこう語られているのですが、そこでイエス様は「わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい」とこう仰っているのです。このことはつまり、私たちが与る聖餐とは、一片のパンのかけらでもなく、また、ぶどうの実から作られたブドウ汁、ブドウ酒でもないということです。私たちが与っているのは、神様の独り子であり、人類の救い主でもあるイエス・キリストの命そのものであり、教会が主の聖餐を長きにわたり守り続けてきたのは、イエス様の命に与っているという、聖餐についての基本的な理解によるものです。

ですから、それは、思いの深い浅いということに止まるものではありません。いわば、私たちの身体感覚がそう思わせ、また、そう言わしめているということです。従って、私たちが信仰の豊かさを味わい知るのには、御言葉と聖餐の分かち合いによってそのような体に作り上げられているからです。そして、この体とはつまり、キリストを頭とする体でもあります。ですから、私たちの信仰において重要なことは、その教義的な理解もさることながら、このキリストの体に組み入れられているという感覚こそがさらに大事なことでもあるのです。それゆえ、人が創り出し、また産み出したものと聖餐を同列に並べ、吟味する態度は主の晩餐に与るにはふさわしくはありません。ただし、それを誤りであると断じるには、一つ注意が必要です。なぜなら、錦の御旗を掲げ、自らの立場を正当化させるため、主の食卓は備えられているわけではないからです。

日本基督教団始め、日本のプロテスタント教会が聖餐を信仰の中心的な事柄として位置づけ、毎月第一主日に必ず与るようになったのは戦後しばらくしてのことであり

ました。ですから、そういう意味では、日本基督教団内の聖餐を巡る諸問題は、分断、断絶というよりも、歴史が浅いがゆえの混乱だと言えるのでしょうか。教会の二千年の歴史を思えば、150年という時間は昨日今日のことであり、ですから、そういう行き違いがあっても不思議ではないからです。けれども、そうであればこそまた、私たち藤沢教会は、そこで何をすればいいのか、この点をよく整理して考えておく必要があるように思います。そして、それは、教会の伝統に則って、主の晚餐を大切にすることはもちろんのこと、大切なことは、私たちが大切にしているものが何か、それ自体を私たち自身が見失わないということです。それが先ほど申しました基本的な理解でもあります。そして、このことの重要性を教えてくれているのがこの日の御言葉であるように思います。ですから、この日の御言葉はそういう意味で私たちの立ち位置をはっきり示してくれているのです。

しかし、この日の御言葉のそれぞれに記されていることは、見てすぐにお分かりのように、それぞれはまったく関連し合っていないように思えるのです。一方は汚れた霊についてのことであり、一方は、イエス様を取り戻そうとするその母、兄弟に関するものだからです。ですから、まったく関連性が見えないことから、正直、どうして別々に扱わなかったのかと私も後悔しきりでありました。ただ、選んだのは私自身です。それゆえ、そこには明確な理由があったはずなのです。そうでなければ、説教題を付けることもできなかったはずだからです。しかし、それをしたのは二ヶ月前のことであり、これは言い訳でしかありませんが、どうしてこうなったのかはどうしても思い出せないのです。ちなみに、お恥ずかしい話ではありますが、こういうことはよくあることです。三歩歩いて、なんで席を立ったのかも思い出せない、二十代の頃からそういうことがしょっちゅうでありました。それは、一度にあれもこれもそれもと、たくさんのことをやろうとするからでもあります。ですから、それは、せっかちだからなのか、それとも欲張りだからなのか、自分でもよく分からないのですが、ただ、頭の中で具体的なイメージがありながら言葉だけがどうして出てこないのです。だから、えーと、あれあれと言い続けるしかない。けれども、見えていても言葉が出てこない、分かっている言葉にならない、都合のいいように聞こえるかも知れませんが、私たちの信仰においては、また

別の意味で、この「言葉にならない」経験がとても大事なことのようにも思うのです。

そこでそれぞれのみ言葉に聞いて参りますと、イエス様が先ず仰っていることは次のことです。汚れた霊が「戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。そこで、出かけていき、自分よりも悪い他の七つの霊と一緒に連れてきて、中に入り込んで住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになる」とイエス様はこう仰るのですが、ところで、その人から悪霊が出て行ったというのはどういうことなのでしょう。それは、その人が清められたということです。そして、その上で荒れ果てず、その人が整えられたままであったということは、つまりは、その効果が持続していたということです。けれども、そこは空き家であり、住む主人がそこにはいなかったとイエス様は仰るのです。では、その主人とは誰なのか、それは私たちにとってはもちろん神様であり、イエス様ご自身に他なりません。では、主人を欠いた空き家とは一体何を意味するのでしょうか。文脈から考えれば、それは、ファリサイ派の人々、律法学者たちということです。つまり、仏作って魂入れずと言われる状態に置かれていたのが、他ならぬファリサイ派、律法学者であったということです。

ですから、彼らのその姿というものを想像するとどういうことになるのでしょうか。賃貸に貸し出す直前の優良物件ということなのでしょう。整えられていたということは、つまりは、そこはとっても住み心地のいい部屋に見えたということです。ただし、それが悪霊の住み処となった、しかも、居座られたために以前よりもっと悪い状態に置かれるようになったと、イエス様は彼らのことを当てこすってこう仰るのです。ですから、それは、仏作って魂入れずと言われるものよりも、もっと悪い状態です。しかも、それは、すばらしく整っているわけです。ですから、一見するだけでは、そこが悪霊の住み処とは分かりにくいものでもあるということです。従って、イエス様がここでこのような例え話を語っているのは、形骸化した彼らの信仰を強く否定しているのは間違いありません。ただ、次の箇所と繋げてみていく時、形式主義的な信仰の単純な否定として、ここでこのようなことをイエス様は仰っているわけではないようにも思うのです。

物事が形骸化した際によく言われることは、魂を込めろ、気持ちを入れろということですが、魂を込めて、思いを込めて、イエス様のもとにやって来たのがイエス様の母とその兄弟たちでありました。そして、恐らくは、これほどの深い思いをもってイエス様のことを見つめた者はこの世には一人もいなかったのではないかと思うのです。肉親の愛ほど強いものはないからです。ところが、そのイエス様がここで何と仰ったのか。「私の母とは誰か。私の兄弟とは誰か。」というこの一言でありました。しかし、話はそれで終わったわけではありません。その上でイエス様が仰ったことは「見なさい。ここに私の母、私の兄弟がいる。だれでも、私の天の父の御心を行う人が私の兄弟、姉妹、また母である」と群衆を指して、イエス様はこのように仰っているのです。ですから、私たちがよく用いる「神の家族」という言葉はここにその根拠を見出すことができるのですが、ただ、私たちにとっては喜ばしいことでも、イエス様の家族にとってはどうだったのでしょうか。この一言は身を引き裂かれんばかりの痛みを感じさせたに違いありません。そこで私たちは、イエス様が血縁などのこの世的な繋がりではなく、信仰的な繋がりを大事にされたとの結論に至るのですが、もちろん、そのような理解が間違っているわけではありません。けれども、ヨハネによる福音書では、愛弟子と言われる一人の若者にご自分の母親の行く末を委ねられたのが十字架上のイエス様でもありました。ですから、ここでのことは、イエス様が血縁や地縁を嫌っているといった、そんな単純な話ではないように思うのです。

ただ、そうであっても、ここから見えてくるものは、やはりイエス様が形式主義と心情主義を嫌っておられるということですから、私たちの信仰はそのどちらでもない、つまり、形式主義でもなく、また心情主義でもない、そういうことになるのですが、では、それは、私たちの信仰が建て前や個人的な感情を一切取り入れないということなのでしょう。それは、頭の中では確かに成り立つものなのかもしれません。けれども、本当にそれを私たちは実行することができるのでしょうか。私は、それはできないことのように思うのです。なぜなら、建て前をすべてなくしたとして、そこに一体何が残るといえるのでしょうか。エリザベス女王の葬儀をご覧になった方は多いことと思いますが、式自体の流れ、それを導く司祭の所作など、葬儀その

ものを通して多くの人々が何かを感じずにはいられなかったのは、エリザベス女王の葬儀にしっかりとした形があったからです。そして、それを形あるものとしたのが英国国教会の信仰でもあります。そして、その信仰を生涯大事にされたのがエリザベス女王でもありました。そして、それは私たちも同じです。だからこそ、あの凜とした佇まいに私たちの多くも心打たれることになったのです。

形骸化した信仰は確かに固く戒められなければなりません。けれども、信仰が形式主義に陥らないためには、信仰には明確な形が求められるのです。そこで、是非一度出エジプト記の後半部分をご覧いただきたいのですが、そこには宗教儀礼にまつわる細かな規定が記されています。それは、この儀礼的なものが一人、二人の思いつきによって作り上げられたものではないからです。一つ一つゆっくりと丁寧に時間をかけて積み上げられてきたものが宗教的儀礼であり、そういう意味で、150年の歴史しか持たない私たち日本のプロテスタント教会はまだまだその途上にあり、従って、聖餐を巡る問題はまさにその途上にあることを示しているように思います。ただ、だから、心情的に分かりやすいところに流されていいということにはならないのです。しかし、だから、心情主義を排除すれば、それで形式が整うかということ、そういうわけにも参りません。仏作って魂入れずと言われる状態が生じるのは、まさに形式だけを整えればそれですむと思っているからでもあります。けれども、思いが深ければそれですべてが事足りるというものでもありません。

イエス様がここで「私の天の父の御心を行う人が私の兄弟、姉妹、また母なのである」と仰るように、教会という私たちの住まいの主人はイエス様の父である神様なのです。ですから、信仰の形式、その所作については、私たちはそう仰るイエス様から手取り足取り教えられる必要があるのです。ところが、イエス様のお顔を知っている者は、私たちに中にはまだ誰一人としていないわけです。このことはつまり、イエス様のことを見たことのない私たちには、学ぶことすら許されてはいないということにもなるのですが、にもかかわらず、教会は、聖書然り、礼拝式然り、讚美歌然り、目に見える形で、実に様々なものを形に表すことが許されたのです。それは、教会のその歴史を通じて、教会に連なるあらゆる人々が、その頭であるイエス様と出会

い、そのイエス様と共に神様を見つめ続けてきたからです。それゆえ、歴史の荒波に耐え、残っているものは美しく、人の心を打つことになるのです。それは、時代を超え、多くの人々がイエス様のその姿を見てきたからでもあります。エリザベス女王の葬儀はまさにそういうものだったと思うのです。ただ、この、イエス様のことを見ているという点では、ファリサイ派の人たちも律法学者も、また、イエス様のその家族も、歴史上のどの優れた人よりも具体的によりはつきりを見て、知って、分かったのです。けれども、そこには明らかな違いがある、では、その違いとは、一体何なのでしょう。

イエス様はどうして形式主義的なものや心情主義的なものを嫌うのでしょうか。それは、そのいずれもが、人が見たいと思うもの、見なければならぬと思込んでいるもの、この自分が見ようとしているものだけを見て終わってしまっているからです。しかも、それぞれには、自分が見ているとの強い思いがあり、事実、ファリサイ派や律法学者も、また、イエス様のその家族も、イエス様のことを見て知って分かっていたわけなのです。ですから、その思いを打ち砕くことは並大抵のことではありません。イエス様のお言葉が厳しいのはそれゆえのことでもあります。ただ、この厳しさについては、私たちにも思い当たるところがあるのではないのでしょうか。見たいと思うものを見て、見なければならぬと人から言われるものを見ようとする、けれども、その企てがいつも成功するわけではなく、ちょうどイエス様の家族がそうであるように、それが徒労に終わることがあるのです。そのような時、私たちはどうして神様と、神様に向かって、またイエス様に向かって文句を言ったりもするのですが、それは、その時の私たちには、確かなものなど何一つも見えてはいないからです。

ですから、そのような場面においては、形ばかりの安易な慰めや、自分の気持ちだけに溺れた優しい言葉が、悪魔のささやきのように私たちの心を引きつけるのです。けれども、形式主義的なものや心情主義的なものがそうであるように、私たちが見たいと思込んでいるものだけを見ることは、結局は人を傷つけるだけで、そこからは何一ついいものが産み出されることはないのです。むしろ、そこで必要なことは、見えないことを受け入れることです。どうして、なぜですかと問うしかない闇の中に立ち続けることなのです。信仰が形式主義や心情

主義に陥らないためにも、イエス様と共に神様に向かって問い続ける時間が必要なのです。そして、この「言葉にならない経験」は決して徒労に終わることはありません。繰り返し繰り返し問い続ける中で、こちらからではなくあちらから、私たちの信仰の本質的なものが浮かび上がってくるからです。聖餐式とはまさにそういうものでもあります。それゆえ、こちらから求め、見ようとするもの、見なければならぬと思込んでいるものは、その思いがどんなに強いものであったとしても、いずれ馬脚を現すことになるのです。ですから、この日、それぞれの御言葉が語りかけてくれていることは、信仰の事柄を自分の頭ですべて整理して理解することの愚かさだと思ふのです。

しかし、そうであるからといって、私たちは何もせずただ黙ってじっとしていればよいということではありません。イエス様が神様の御心を行う人が私の兄弟姉妹であり母なのであるとあるように、御心を行い、この御心を身をもって現し続けるのが私たち信仰者でもあるのです。ただし、このことはまた、今まで申し上げたことを踏まえるなら、堂々巡りを繰り返すしかないのが私たち信仰者だとも言えるのでしょうか。しかし、どうでしょうか。それは、私たちにとって悪いものなのでしょうか。確かに、すぐに見たいと思うものが見えないことは気持ちの悪いものです。けれども、だからこそまた、長きにわたり積み上げてきた形式が意味を持つのです。それは、一つの定まった形に身を置く時、この言葉にならない経験を通して、私たちは自分自身が受け止められていると、この思いを深め、強くすることになるからです。主の聖餐とはそういうものであり、イエス様の命をいただくことで私たちは、神様に愛されている自分自身を再び取り戻すことになるのです。ですから、神様に愛されていることを知った私たちは、自分だけが見たいもの、見ようとするものを見つめることはありません。神様の眼差しの中で、イエス様と共に御心をなす、そこで私たちは自分本来の姿をもって生きることになるのです。祈りましょう。